

ポエムの窓

文・高安義郎

鉄と紙

北原 政吉

いまさら憶う

あのころは どうしてあんなに

楽しかったのであろう

じゃんけんぼん

じゃんけんぼんの 鉄と紙で

あなたとわたしは

いっぽ いっぽ 遠のいていった

詩集「影」より

今回紹介させて頂いた作品は、私の、詩の先生のお一人とも言うべき大先輩北原政吉さんの詩です。

この作品はごく若い頃、手に取ったことがあります。その時はさほど心に響いた記憶はありません。その頃の私は当時主流であったシュールレアリズムの、難解な詩を良しとする傾向があったからで、書かれていることが分かる作品は価値が低いとさえ思っていたのです。しかし五十年ほど詩を書き続けてきた今になって、この作品の良さがようやく分かったように思えます。

この作品『鉄と紙』はジャンケンのおサミ、つまりチョキとパーです。子供の頃遊びの順番などを決めるのにジャンケンは良くやりました。ジャンケンそのものでも遊びました。紙、つまりパーで勝つと「パイナップル」と唱えながら石段をあがり、チョッキで勝つと「チョコレイト」、グーでは「グリコウス」と唱えて六歩あるいは五歩進みます。そうして誰が最初に階段の頂上に行き着くかを競ったりしました。この詩を読み直した時私の脳裏にはこの石段遊びが暗闇の扉を開いたように蘇ったのでした。ジャンケンに負け続けると相手はどんどん先へと進み悔しい思いをした覚えもあります。ところで作品の冒頭で、

―あのころは どうしてあんなに
楽しかったのであろう

と昔に思いを馳せています。あの頃とは当然子供の頃ですが、子供の頃は今日の糧をどうしようか、などという煩わしいことは考えていません。ともかく今を遊ぶことだけだったからでしょう。作者もそれは分かっているはずですがあえて「どうして」と自問しています。それがこの作品の考えさせられる所なのです。そして最後に、

―あなたとわたしは
いっぽ いっぽ 遠のいていった

と結んでいます。『あなた』とは、少年時代の思い出そのものや幼なじみと考えてもいいでしょうし、恋人とも考えられます。あるいは子供の頃抱いた夢や、理想とした生き方をさしているとも言えるでしょう。それがいつの間にか現実の中にまぎれ、夢の彼方に遠のいてしまったのです。一見頭の中を素通りしてしまいそうなやさしい作品ですが、読者の胸に多くのものを想わせます。

詩というものはパズルでもなければソクラテスの言うイデアの世界を覗くと言ったような小難しいものではありません。あくまでも心を癒やす歌なのです。恥ずか

しながら私はようやくそれに気づかされました。北原先輩の声がやっと耳に届いたと言えるのかも知れません。しかも身近なジャンケンで気づかされたことが、私には何より心温まる思いです。

これは余談ですが、ジャンケンはそんなに古いものではなく明治の始め頃に広まった日本独自のものですが、今では諸外国のまで普及し始めていると聞いています。

この作品の作者北原政吉さんは平成一七年に九七歳で亡くなられました。幼少時代に過ごした台湾との文学交流に力を入れられ、台湾の詩人達と多くの作品を残されました。また千葉県詩人クラブの創設にも尽力され、このクラブは現在百数十名の会員を持つ大きな会に成長しています。

北原さんの残された詩集には次のようなものがあります。

『候鳥』 『影』 『龍』
『はんぐりいの歌』
『署名のない絵』
『華麗島詩月紀行』
『酋長シバの歌』

この他北原政吉詩集といった全集や、戦時中に栄養失調で逝ったまな娘を悼む、心揺さぶられる詩集『笙子』などもあります。折に触れてまた紹介させていただこうと思えます。